

きょうかん賞

「子どもと過ごす時間」

武田 寿子さん（京都市左京区）

子どもというのは、見ているだけでとても楽しい存在です。ウルトラマンになりきって見えない怪獣と戦っている姿。つたない手で箸を持ち、ご飯をほおぼるまあるい顔。この子のために私はいったい何ができるだろう？。そんなふう子どもをながめているうちに、ふと気づいたことがあります。子どもはその都度必要なものを要求しながら自ずから成長していくのではないか、ということに。

考えてみれば、赤ちゃんの頃からおなかが減ったとっては泣き、眠いと言っでは泣くことで自分に必要なものをこちらに要求してきたのです。それはまず生命を維持するうえでとても重要な要求でした。それと同じように、社会的な存在として成長するために、自ずから必要な何ごとかを私たちに要求してきているように思ったのです。

たとえば、いっしょに散歩しているといろいろな働く人たちを目にします。小さな子どもにとってはどれも興味津々。それがどういう職業で、この社会にとってどんな意味を持っているのか、説明するのも大変でした。でも、「どんなお仕事したい？」と聞いて返ってくる子どもの答えには意外な楽しみがありました。

そのうち「お母さんは何になってほしいの？」と聞いてくるようになりました。ちょっと思考が行き詰まってきたのだろうか？そこで私は一つの条件を出しました。「人を幸せにしてあげられる仕事、あとは自分で考えて、何でもいいよ」それから彼の基準は「人を幸せにしてあげられるかどうか」になりました。しかしここで一つ課題ができたのです。「自分の好きなことが人の幸せにつながるかどうか」です。自分が関心を向けるものが、どんなふう人々の営みに関わっているのか、一生懸命考えているうちに、彼の興味は多方面に広がってきました。国の働きや、経済の動き、社会の矛盾や死生観についてまでも。そして、各々別々に起こっているように見える事象が、実はそれぞれ有機的に結びついて起こっていることに気づき、自分なりの考えを解説してくれることもあります。

子どもに何を教えよう、何を与えてやればいいのか？それはけだし愚問であって、ただそのときの要求に応じて、一緒に悩み、問いかけ、そしてあらぬ方向へ流れていかないようにだけ気を付けてやればいいのかと思います。

いつかこの子も「お母さん、お母さん」といってまとわりついてはくれなくなるでしょう。その時まで、ゆっくり子どもとの時間を楽しんでいようと思っています。